

# 八尾歴史物語

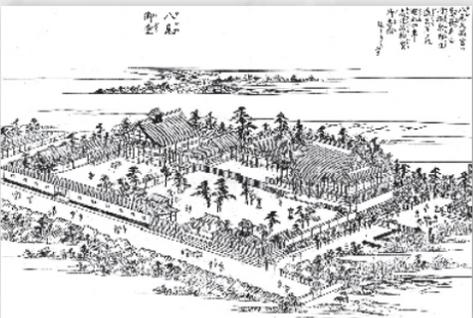
## 十巻

河内名所図会を訪ねて その4 (大信寺) (だいしんじ)

顕証寺を中心とする久宝寺寺内町から分かれ、八尾寺内町の中心寺院となったのが、江戸時代初め、本願寺教如によって創建された八尾御坊・大信寺でした。大信寺の伽藍がらんの構成や建物の様子は、河内名

所図会で詳しく描かれています。

伽藍には、右手奥の本堂のほか、京都・伏見城より移されたという太鼓楼たごろうや、成思庵せいしあんという茶室、対面所たいめんじょ、大玄関おおげんかん、庫裏くら、表門なげやもん、長屋門ながやもんなど多くの建物で構成されていたことが分かります。本堂は、江戸時代の半ばを過ぎた明和4年(1767年)に再建されたものです。しかし、その本堂は、天明8年(1788年)の大火で焼けた東本願寺の御影堂ごえいどうの仮御堂みどうとして京都に移築され、八尾に再び建てられたのは、およそ10



年後の寛政11年(1799年)です。名所図会の刊行が享和元年(1801年)で、まさに本堂が再建された直後の姿を正確に描いたと考えられます。

その後、明治2年(1869年)の1月から8月までの堺県さかいけんに編入される短い間ですが、「河内県庁」が大信寺の境内に置かれました。県庁跡は、現在、府指定史跡になっています。そして、昭和28年(1953年)、白アリの被害により本堂が倒壊したため、昭和42年(1967年)に現在の鉄筋コンクリート造りの本堂に再建されました。

江戸時代、立派な伽藍を持った大信寺の姿は、河内名所図会でしか見ることができませんが、現在の姿に至るまで長い歴史の物語を重ねてきた寺院です。